

令和5年度

研究紀要

第58号

<2ヶ年継続研究～1年次>

《研究主題》

『主体的・対話的で深い学び』の

実現に向けた指導の工夫・改善



室蘭港のイルカ

室蘭市教育研究所

研究紀要の発刊にあたって

室蘭市教育研究所長 入 村 貴 行

室蘭市立小・中学校の校長先生をはじめ教職員の皆様におかれましては、日頃より本研究所の事業に格別のご理解とご協力をいただきまして、心より感謝を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の位置付けが「5類」に移行し、子どもたち同士の関わり合いや、教職員と子どもたちとの関わり合いの場面が再び見られるようになってきました。子どもたちの「生きる力」を育み、すべての子どもたちが「楽しい」と感じる学校を実現すべく、日々各学校で一丸となって邁進されておられますことに、心より敬意を表します。

さて、本研究所では「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた指導の工夫・改善～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けて～」を主題として、8名の所員が中心となって研究に取り組んでまいりました。「授業づくりグループ」と「ICT活用グループ」の2つのグループに分かれてはおりますが、『主体的・対話的で深い学び』を実現していくために、両グループの所員が一体となって話し合い、活動する場面が多く見られた1年間でありました。ICTは今や授業づくりに欠かすことのできないツールであり、「授業づくり」と「ICTの活用」は一体的に研究していくべきものであります。2つのグループがコラボして実施した夏の研修講座でも、ご参加いただいた40余名の先生方に「授業づくり」と「ICTの活用」の両面から研修を深めていただくことができました。

また、学力向上研究奨励校事業やパイロットスクール事業におきましては、研究指定校4校で公開研究会を実施し、各学校の研究成果を市内に発信・還元していただきました。両事業は、他校の研究や授業実践に直に触れ、研究協議で多くの先生方と意見を交流できる貴重な機会となるものであります。指定校4校の皆様のご尽力に、厚くお礼申し上げます。

昨年度末に「室蘭市教育研究会」が解散し、部会研修や教科別授業研究集会も廃止となりましたが、4年ぶりに集合形式で実施した夏の研修講座後のアンケートでは「所属校以外の先生方と交流する機会が少なくなった」「各校の実践を交流する機会があるとよい」「研修講座に限らず情報を共有できる仕組みがあるとうれしい」という声が寄せられ、先生方の新たな学びのニーズが浮き彫りになってきました。本研究所では、「先生方のニーズにどう応えていけばよいのか」「研究所はどうあるべきなのか」という大きなテーマについても年度当初に計画していた調査・研究と並行して議論を重ね、所員のアイデアから各学校の校内研修の内容の共有や校内授業研究会への参加など、新たな取組もスタートさせたところです。これらの取組も含めまして、今年度の研究の成果を本研究紀要として取りまとめましたので、是非ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

今後も、各学校と連携しながら、本研究所の設立目的である「室蘭の教育振興に資する取組の推進」と「室蘭の教育を担う人材の育成」に努めてまいりますので、引き続き皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、ご多用の中、本研究所の事業にご指導、ご助言、ご協力くださいましたすべての皆様に心より感謝を申し上げ、研究紀要発刊のご挨拶とさせていただきます。

《 目 次 》

※研究紀要の発刊にあたって

室蘭市教育研究所 所長 入村 貴行

I 研究の概要

- 1 研究のねらい
- 2 研究主題
- 3 研究内容 研究の概要 1～4
- 4 研究の構想
- 5 研究の推進計画

II 研究部の実践研究

1 授業づくりグループの実践

- (1) 研究課題
- (2) 研究の内容（概要） 授業づくりグループ 1～5
- (3) 研究の具体
- (4) 成果と課題
- (5) 今後に向けて

2 ICT活用グループの実践

- (1) 研究課題
- (2) 研究の内容（概要） I C T活用グループ 1～2
- (3) 研究の具体
- (4) 成果と課題
- (5) 今後に向けて

III 「室蘭市学力向上事業研究奨励校」「室蘭市パイロットスクール事業研究指定校」の研究

1 室蘭市学力向上事業研究奨励校

- (1) 室蘭市立白蘭小学校 1～7
- (2) 室蘭市立桜蘭中学校 1～6

2 室蘭市パイロットスクール事業研究指定校

- (1) 室蘭市立みなと小学校 1～6
- (2) 室蘭市立東明中学校 1～6

※あとがき

室蘭市教育研究所 副所長 河内 大

◆令和5年度「室蘭市教育研究所」組織・所員等一覧

◆令和5年度 室蘭市教育研究所研究部事業報告

I 研究の概要

1 研究のねらい

本市においては、今年度より「室蘭市子ども未来指針」が策定され、「小中一体となった教育」、「家庭と地域が参画して学校と一体となった教育」を推進していく運びとなった。

これを受け、本研究所においては、「室蘭市子ども未来指針」に則し、小中一体となった「より質の高い授業」を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて教育研究を推進していくこととした。

2 研究主題

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた指導の工夫・改善 ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現に向けて～

主題設定の理由

(1) 「室蘭市学校教育の重点」から

室蘭市教育委員会が示した令和5年度の「学校教育の重点」は、次の2点である。

- | |
|--------------------------------|
| 重点Ⅰ 小中一体となった教育（9年間の計画的、系統的な学習） |
| 重点Ⅱ 家庭・地域が参画して、学校と一体となった教育 |

本研究所は、「重点Ⅰ」に軸足を置き、小中一体となった「より質の高い授業づくり」に向けた課題解決に資する教育研究を推進した。

(2) 本市の子どもたちの実態と課題（全国学力・学習状況調査, 標準学力検査の結果）から

全国諸調査で明らかになった本市の子どもたちの実態と課題（下記参照）を踏まえ、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた教育研究を推進した。

【児童の課題】

<国語>

- ・登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。
- ・文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。

<算数>

- ・示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察すること。
- ・百分率で表された割合と基準量から、比較量を求めること。
- ・加法と乗法の混合したポイント数の求め方を解釈し、ほかの場合のポイント数の求め方と答えを記述すること。

【生徒の課題】

<国語>

- ・自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと。
- ・論理の展開などに注意して聞くこと。

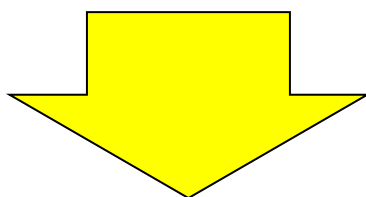
<数学>

- ・自然数を素数の積で表すこと。
- ・簡単な連立二元一次方程式を解くこと。
- ・データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること。

【児童生徒の学習・生活習慣の実態（課題面）】

<全国平均と比べて>

- ・日常の読書習慣が身に付いている児童生徒の割合が低い。
- ・家庭学習を十分行っている児童の割合が全国に比べて低い。
- ・自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒の割合が全国に比べて低い。



- 基礎的・基本的な学習内容の確実な習得と活用力の育成、学習意欲の向上
- 望ましい学習習慣・生活習慣の確立、学習環境の整備、学習規律の徹底
- 協働的な学びの充実

3 研究の計画

- ・R7年度の「室蘭市子ども未来指針」完全実施に合わせ、R5年度より2年計画で研究を推進する。
- ・研究の手順を明らかにするため、P【計画】→D【実施】→C【評価】→A【改善】のマネジメントサイクルの視点を重視し計画する。

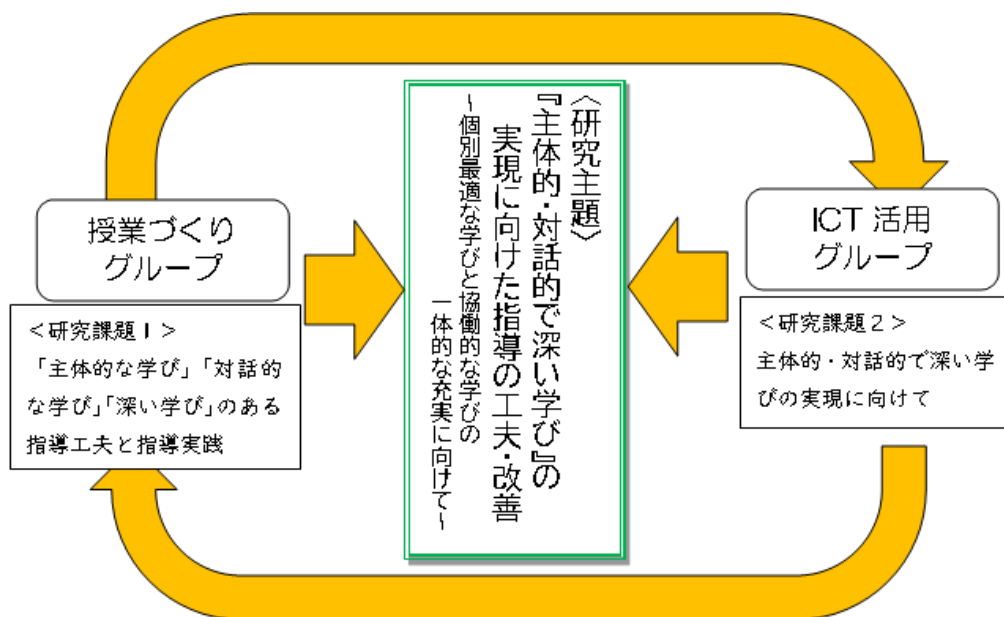
研究年次	Plan【計画】	Do【実施】	Check【評価】	Action【改善】
1年次 (令和5年度)	・研究課題の把握 ・研究主題の設定 ・研究内容の具体化 ・検証計画の樹立	・検証のための実践	・研究結果の整理 ・初年度のまとめ ・成果と課題の発表	・計画の見直し
2年次 (令和6年度)	・推進計画の見直し ・研究主題の設定 ・研究内容の具体化	・研究内容の実践	・研究結果の整理 ・研究のまとめ ・成果と課題の発表	・次年度以降の研究の方向性検討

4 研究の構想と内容

「授業づくり」・「ICT 活用」の2つのテーマに特化するとともに、所員会議や研修講座等においては集合型やオンライン、オンデマンド等 ICT の積極的な活用を図った。また、所員による公開授業の開催を必須とせず、各グループの研究方針に合わせた柔軟な取組を実践してきた。

○研究部

研究テーマ「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた指導の工夫・改善」
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現に向けて～



【授業づくりグループ】

構成員～副所長（市内教頭1），所員4名（小2，中2）

研究内容

- ・市内各校の研究主題を収集し内容を把握。それを基に、本市の教育の方向性を検討。
- ・市内4校の公開授業研究会に参加し、各校の実践を市内全体に還元。
- ・系統性を意識した指導計画と学習指導案づくりに係る研修講座の実施。

【ICT活用グループ】

構成員～主任所員（指導主事1），所員4名（小2，中2）

研究内容

- ・端末活用実践の積み重ねと活用推進。
- ・ICTを活用した協働学習のシステムと使い方に係る実技研修。
- ・ICT交流サロンの活性化とGoogleサイト移行への検討。

【授業づくりグループ】【ICT活用グループ】共同研究

(1) 夏の研修講座「どう活用する？デジタルドリル」

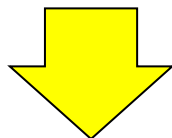
令和5年7月31日（月） 室蘭市立白蘭小学校

- 「スマイルネクスト操作方法」【実技講習】
講師 加藤 翔貴（ジャストシステム）
- 「スマイルノートを活用した授業実践」【模擬授業】
講師 研究所員 小林 雅哉（室蘭市立地球岬小学校教諭）
- 「デジタルとアナログの使い分け」【報告】
講師 研究所員 宮野 亜希子（室蘭市立蘭北小学校教諭）

(2) 今後の室蘭市教育研究所の在り方について検討

本市では、室蘭市教育研究会が一定の役割を終え解散した。その結果、所属校以外の仲間の実践に触れたり、情報を交換したりする機会が減少し、市内の教職員からは、「市内の実践交流ができると良い」、「情報を共有できる場が欲しい」といった声がたくさん寄せられた。

そこで、室蘭市教育研究所としての立ち位置や役割を再検討し、教育研究所の在り方について検討することとした。



**つながりの仲立ちをする役目を担う
室蘭市教育研究所**

(3) 校内授業研究会訪問

研究所員が所属校以外の校内授業研究会に参加し、共に学ばせていただくこととした。今後は、希望する教職員の参加についても検討していきたい。

学 校	日 時	教 科	研究所員
旭が丘小学校	11月27日（月）	国語・算数 社会・音楽	宮野 亜希子
翔陽中学校	12月5日（火）	数学・英語	土田 一輝 坂上 優
港北中学校	11月27日（月） 12月11日（月）	音楽	山本 祐揮
八丁平小学校	12月20日（水）	国語	小林 雅哉 宮野 亜希子

Ⅱ 「研究部」の実践研究

1 『授業づくりグループ』の実践

- (1) 研究課題
- (2) 研究の内容
- (3) 研究の具体
- (4) 成果と課題
- (5) 今後に向けて

『授業づくりグループ』の所員

リーダー



宮野 亜希子
(蘭北小学校)

副リーダー



山本 祐揮
(室蘭西中学校)



木戸 なつみ
(八丁平小学校)



坂上 優
(桜蘭中学校)



河内 大 副所長
(海陽小学校教頭)

○授業づくりグループの実践

(1) 研究課題

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のある指導工夫と指導実践

(2) 研究の内容（概要）

- ①室蘭市内各校の研究について把握するとともに、研究所としての役割を探っていく。
- ②ICT活用グループと連携し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業構成のあり方を探っていく。
- ③系統性を意識した指導計画と学習指導案づくりのための研修講座を実施する。

(3) 研究の具体

市内各校の研究主題や研究内容等を集約し、それぞれの研究について把握した。その中でICTの活用を研究内容としている学校が多かったため、ICT活用グループと連携し、授業でのICTの効果的な活用について各校の実践を市内で還流できるような手立てについて検討した。

○7月31日（月） 夏の研修講座（宮野所員）

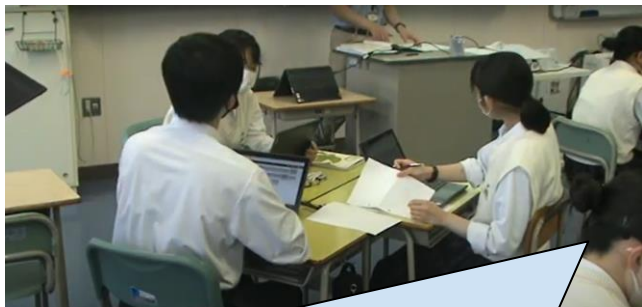


ICT端末の効果的な活用方法として、グーグルドキュメントを利用した共同編集作業やカメラアプリを用いた実践事例が紹介されました。一方で、ICTだけに依存するのではなく、具体物を操作したり、直接、対話を通して問題解決を図ったりすることで、より学習効果が上がる場合もあるなど、デジタルとアナログを「必要に応じて使い分けていくこと」が大切であると説明がありました。

今年度の室蘭市指定公開研究会（学力向上事業研究奨励校、パイロットスクール事業研究指定校）に所員が参加し、市内の学校の実践に直接触れる機会を設け、研究を深めた。

<学力向上事業研究奨励校>

○10月18日（水） 桜蘭中学校（山本所員 木戸所員参加 坂上所員所属校）



桜蘭中学校

『自らの課題に気づき、主体的に学習する生徒の育成』

7月の校内研では「理科、数学、技術、生活単元（支援学級）」、10月の公開研では「国語、社会、英語、体育」の授業が公開されました。どの授業も、生徒が「やってみよう」と主体的に学習に取り組むことができる工夫がなされていました。3年生の数学（写真左）では、自分で学習スタイルを選択する「指導の個別化」に重点が置かれた授業を、1年生の国語（写真右）では、端末を活用しグループ内で中間発表会を行った後、より質の高い発表に向けて原稿を推敲していく授業が行われました。

○11月22日（水） 白蘭小学校（木戸所員、宮野所員、佐藤所員参加 土田所員所属校）



白蘭小学校

『主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方』

実現したい子どもの姿（ピクトグラム）を可視化した授業づくりについて研究を深めています。11月の公開研では「国語、算数」の授業が公開され、どの授業も日々の学習の積み重ねによって成長した子どもたちの姿が見られた授業でした。事後研では、ワークショップ型の協議の後にポスターセッションを行うことで、協議内容をさらに深めることができました。

○11月2日（木） 東明中学校（山本所員、坂上所員参加）



東明中学校

『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善～ICTの効果的な活用を通して～』

11月の公開研では、「英語、理科」の授業が公開されました。生徒が主体的に学習に取り組めるよう、ICT機器を効果的に活用した授業が行われました。1年生の英語（写真）では、撮影した発表練習動画を基に相互にアドバイスをして、協働的にスピーチの質を高めていく授業を、1年生の理科では、Winbirdを活用し一人一人の考えを全体共有することで、個の考えをさらに広げたり深めたりすることができる授業が展開されました。

○11月14日（火） みなと小学校（木戸所員、宮野所員参加）

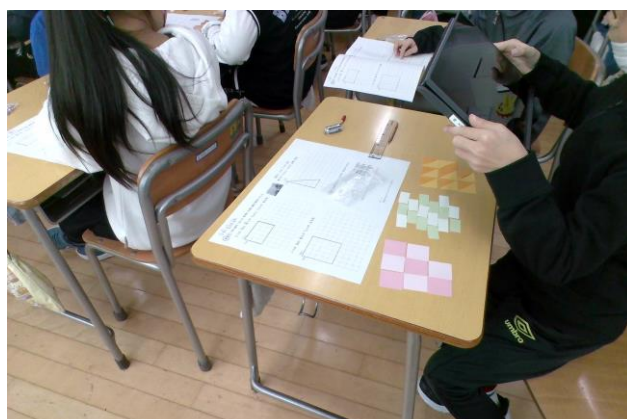


みなと小学校

『読解力と表現力を育む説明文の学習指導の工夫』

国語科を「全ての学習における言語活動の根幹」として位置付け、「読むこと」に特化した研究を行っています。具体として、指導事項を確実に身に付けさせ、その力を活用して読む力を育む工夫に焦点を当てています。また、説明的文章における指導事項系統一覧の作成や指導事項を明確にした学習指導案の作成により、学校全体で指導すべきことを意識化できるようにしていました。

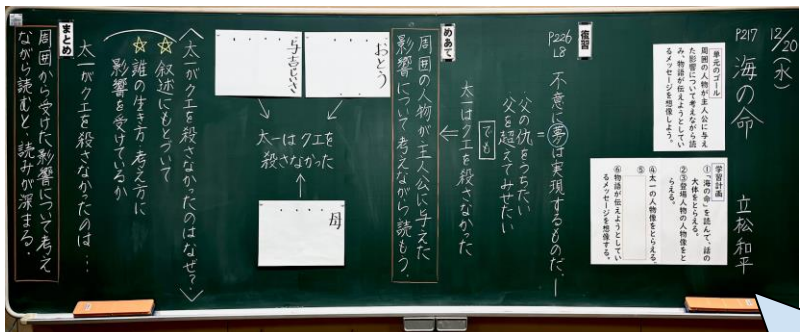
各校の校内授業研への参加も行ないました。



旭ヶ丘小学校 (研究主題はありません)

『児童が自分で学習のめあてをもち、振り返り、次の課題や目標へつなぐことができるようにする』
 『「生き生き」と学習するための手立てを模索する』

11月の校内研では、「音楽、算数、社会、国語」の授業が公開されました。「生き生き」と学ぶ児童を育成していくため、各学年・学級の実態に応じた手立て（やってみよう）の視点を取り入れ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を実現させる授業づくりに取り組んでいました。2年生音楽（写真左）では、kahoot!を使った音当てクイズを、2年生算数（写真右）では、子どもたち自らが授業の進度を決定していく自由進度学習を進めていました。



八丁平小学校

『自ら考え、共に学び合う子の育成～全教科・領域の学習を通して～』

12月の校内研では、「国語」の授業が公開されました。「海（うみ）の命（いのち）」を題材に、単元の中での一単位時間の位置付けをしっかりと意識しながら、指導事項を明確にした授業づくりを目指していました。物語文では、深い読み取り中心の授業ではなく、単元のゴールを子どもたち自身も明確にした上で、自分の考えを友だちと伝え合う活動に取り組んでいました。

港北中学校

『自己有用感を高める授業改善
 ～「主体的、対話的で深い学び」
 を通した「わたしだってやればできる」
 の実現～』

音楽の授業では、組曲「展覧会の絵」を聴き、曲のよさや魅力についてグループ内でプレゼンしました。友だちの発表を聞くことで、新たな視点から曲のよさについて気付くことができるなど、協働的な学習が効果的に行われていた授業でした。



(4) 成果と課題

*各校の研究主題や研究内容の把握を行うことにより、先生方が求めている研修の方向性について知ることができた。それを踏まえ、各校の校内授業研への参加という事業を位置付けることができ、校内授業研参加の意義を所員が実感することができた。

(5) 今後に向けて

*市教研廃止の今、コロナ禍を経て先生方が所属校以外の様々な実践に触れる機会が少なくなっている。校内授業研への参加は大変有意義であり、視野が広がることを所員が実感した。来年度は、所員のみではなく他の先生たちにも自分の目で見て肌で感じていただく機会を設けることで、授業づくりのヒントを得ることができ、自らの授業力向上につなげられるのではないかと考える。

2 『ICT活用グループ』の実践

- (1) 研究課題
- (2) 研究の内容
- (3) 研究の具体
- (4) 成果と課題
- (5) 今後に向けて

『ICT活用グループ』の所員

リーダー



土田 一輝
(白蘭小学校)



小林 雅哉
(地球岬小学校)



加藤 康平
(翔陽中学校)



佐藤 昌也
(本室蘭中学校)

ICT活用グループの実践

(1) 研究課題 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」

(2) 研究の内容（概要）

- ・教員のICTスキルを向上させる機会の創出や活用実践例の発信により、学習用端末のより効果的な活用を促進する。

(3) 研究の具体

①「ICT活用に関わる研修講座と実践紹介の場の設定」

今年度、市内全小中学校に試験導入されたAI型学習ドリル（スマイルドリル）と協働学習アプリ（スマイルノート）の効果的な活用を目的として、研修講座を開催した。講座の前半では、メーカー担当者を講師として、ドリルの機能や使い方、アプリを活用した協働学習について、実技講習を行った。ICTの効果的な活用により、学習効果を高め、思考力・判断力・表現力の育成を図るなど、授業づくりの質の向上について研修を深めた。講座の後半では、本研究所ICT活用グループ所員によるスマイルノートを用いた対話的な学習活動を体験した他、本研究所授業づくりグループによる実践紹介を行った。

②「ICT活用交流サロンの活性化」

教職員のICTスキル向上を目的として、オンライン上での情報共有の場となるICT交流サロンを開設している。掲載内容について、ポータルサイトから必要な情報をスムーズに検索できるようにするなど利便性の向上を図った。また、研修講座の動画データをクリップ化して配信したほか、ICT端末活用方法等の実践紹介を掲載した。

(4) 成果と課題

①成果

研修講座を集合型で開催することで、実践レベルでの情報を交換し、教員同士が学び合う機会とすることができた。また、実際にアプリケーションの操作をすることで、新たな気付きにつなげることができただけでなく、授業におけるICT活用についての説明を受けた後に模擬授業形式の研修を行うことで、児童生徒を意識したICTスキルの向上につなげることができた。参加者からは、「分かりやすかった」「自分もやってみたい」「ポータルサイト化することで内容が一目で分かってよい」「学校に還流したい」など、前向きな評価につながった。



②課題

ICT活用交流サロンの参加者は増えているが、実践紹介に留まらず、ICT活用に関わって分からないことや困っていることなどを相談したり、共有したりすることができる交流拠点としていきたい。

(5) 今後に向けて

ニーズに応じた研修講座の開催や取組を交流する機会や情報共有ができる場を設定したい。

《資料》

室蘭市ICT活用交流サロン 投稿資料（投稿順） 2024.2.26 現在

	教科領域等	内 容 等
1	音 楽	創造力を培う音楽のアレンジ活動
2	小学 総合	Meet を使ったの宿泊学習説明
3	国 語	Jamboardを活用した意見交流
4	中学 道徳	フォームを使ってクラスの傾向を共有する
5	中学 理科	ドキュメントを活用したレポート作成
6	中学 音楽	Flat for Educationを用いた授業
7	中学 学活	フォーム・スプレッドシートを用いて体温調査
8	5年 図工	カメラ、ドキュメントを活用した造形遊び
9	6年 国語	Googleドキュメントの共同編集による提案文作成
10	全教科	探した資料をストリームでシェアする
11	国 語	Googleスライドを使った漢字フラッシュ
12	中学 数学	フォームを使った計算問題確認
13	5年 総合	ブラウザ検索 Jam boardを活用した調べ学習
14	5年 道徳	スライドを活用した題材の提示
15	6年 算数	地図アプリを使った「およその面積」の学習
16	全教科	「学びのガイド」
17	6年 算数	Googleスプレッドシートで「表を使って考えよう」
18	全教科	Googleフォームを使った理解度チェック
19	1年 国語	「じどう車くらべ」 クラスルームを活用した資料の提示
20	全教科	Jamboard 付箋機能を活用するための背景設定
21	全教科	テキストマイニングを使った問いづくり
22	特別活動	委員会活動における各委員会の記録シート
23	4年 算数	「折れ線グラフ」 スプレッドシートの活用
24	6年 家庭	ごみ分別の方法を「Kahoot!」を活用して楽しく覚える
25	5年 音楽	器楽合奏パート練習 共有ドライブに音源を入れる活用
26	全学年	Googleサイトを使って学習ポータルをつくる
27	5年 国語	ジャムボードを使った俳句作りの指導
28	全学年	ドキュメントを活用した係活動のポスター作り
29	全学年	「グーグルフォーム」の「チェックボックス」を使って「投票」
30	各教科	スプレッドシートを活用した「教科ごとの単元ふり返りシート」
31	小学 体育	フォームを活用した、貸スケート靴必要希望調査
32	中学 理科	教科用ポータルサイトの作成
33	教職員向け	活用できる！はじめてのChromebook
34	全学年	Googleフォームを使った健康観察記録の作り方
35	全学年	Kahoot! 共同編集用フォーム
36	教職員向け	12月26日研修講座「Kahoot!」スライド資料
37	教職員向け	googleサイトを使った学級ポータルサイトの作り方 解説動画
38	教職員向け	R5 夏の研修講座の動画クリップ

Ⅲ 研究奨励校・研究指定校の研究・実践

1 室蘭市学力向上事業研究奨励校

(1) 室蘭市立白蘭小学校

【研究主題】

主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方
～実現したい子どもの姿（ピクトグラム）を目指した授業づくり～

(2) 室蘭市立桜蘭中学校

【研究主題】

自らの学びに気づき、主体的に学習する生徒の育成

2 室蘭市パイロットスクール事業研究指定校

(1) 室蘭市立みなと小学校

【研究主題】

読解力と表現力を育む説明文の学習指導の工夫
(特別支援学級：読解力と表現力を育む国語科の学習指導の工夫)
～指導事項を焦点化した課題設定を通して～

(2) 室蘭市立東明中学校

【研究主題】

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
～ICTの効果的な活用を通して～

室蘭市立白蘭小学校（室蘭市学力向上事業研究奨励校）

1. 研究主題

主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方
～実現したい子どもの姿（ピクトグラム）を目指した授業づくり～

2. 主題設定の理由

昨年度は『主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方』を研究主題に掲げ、国語・社会・算数・理科を中心として研究授業にて研究仮説を検証し、実践を重ねてきた。昨年度の研究の反省から、成果として、

- ・単元で身に付けたい力を教師側が明確にもつことで、児童にも目的が伝わる。
- ・意図的にグループを組ませたり、人数を決めたりした上で、対話する目的を意識させることで、活発な交流ができる。
- ・習得したこと（既習事項）を活用して新たな学びにつなげる授業が見られ、学びの連続性という観点から、子どもたちの内面での深まりが感じられた。

等が挙げられた。一方で、課題として、

- ・単元で身に付けた力を、他教科や次単元に生かすところまでつなげられない。
- ・楽しそうに話をしているが、自分の考えを見直すところまではいかない。
- ・次の学びへつなげる意欲は高まっていたが、実際に力を生かしたかは、定かではない。

等が挙げられた。

そこで、今年度は、研究主題は継続し、教科については全教科を対象とし、さらに視点を広げて研修を進めていきたいと考えている。また、ピクトグラムを用いてイメージ化を図っている、実現したい子どもの姿を目指す授業づくりに取り組むことを通して、具体的な子どもたちの姿を描きながら授業改善を図り、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す。

本研修において、子どもの実態や変容、目指す子ども像をしっかりと分析しながら、研究主題に迫っていくとともに、教育目標の具現化にもつなげていきたい。

3. 研究仮説

仮説 1

主体的な学びが促されるような単元構成や課題設定、振り返りを工夫することができれば、『主体的な学びのある授業づくり』をしていくことができるであろう。

仮説 2

対話的な学びが促されるような場や状況の設定を工夫することができれば、他者との伝え合いを通して、考え方や感じ方の違いに気づいたり、自分の考えを見直し形成したりでき、『対話的な学びのある授業づくり』をしていくことができるであろう。

仮説 3

考えの広がりや深まりを実感できる場の設定、連続性のある学びを工夫することができれば、学びを自覚することができ、『深い学びのある授業づくり』をしていくことができるであろう。

4. 目指す子ども像



5. 研究内容

①研究内容

(1) 『主体的な学びのある授業づくりの取組』

- ・単元のねらいやつきたい力、領域の特質に応じた見方・考え方を踏まえた単元の学習計画の作成
- ・振り返りを大切にした学習過程の実践と定着
- ・振り返りの活用
- ・学習規律の定着

(2) 『対話的な学びのある授業づくりの取組』

- ・自分の考えをもって表現（説明）する場の設定
- ・ペア学習、交流学习の場の設定（児童相互での課題解決）
- ・考えを分かりやすく伝える力の育成
- ・相手の意見を聞き受け止める姿勢の育成

(3) 『深い学びのある授業づくりの取組』

- ・考えの変容や新しい気付きを共有する場面の設定
- ・主体的・対話的で深い学びを身に付けさせる手立てと評価の仕方
- ・既習事項等の知識・技能を活用する授業の構築
- ・掲示物の共通化

②研究方法

(1) 理論研究

- ・研究内容の検討と推進
- ・授業改善
- ・目指す子ども像の設定
- ・児童の実態からの身に付けさせたい力の追究
- ・主体的・対話的で深い学びの実現

(2) 全学級公開による授業研究

- ・全体授業研究は各ブロック1回ずつ、計3回ブロックごとに指導案検討を行い、全校研後、全体で研究仮説の検証を行う。公開研もブロック1本ずつ公開する。
- ・ブロック研授業（国語・社会・生活・算数・理科のいずれか）
今年度に限り、特別支援学級のみが実施。指導案もしくは指導略案を作成し、2月のブロック別授業研究週間に授業をする。

(3) 全体研修

- ・研究内容の全体理解、確認
- ・研究紀要の検討、作成
- ・研究の成果と課題
- ・来年度の方向性

(4) 実技講習会・ミニ研修会

- ・本校の研究内容と並行し、今求められる力や共通理解を図りたい事柄について、講義・演習・討議・ワークショップ等を行う。
- ・年に2～3回程度時間を設定するが、任意参加とする。

③研究の年次計画

1年次（令和3年度）研究の構築・実践

- ・主体的・対話的で深い学びのある授業の構想と実践
- ・個人テーマに基づいた授業の構想と実践
- ・校内研修の推進
- ・校内研究の成果と課題の検討
- ・タブレットを活用した授業実践に係わる研修

2年次（令和4年度）研究の実践・深化

- ・主体的・対話的で深い学びのある授業の実践と深化・検証
- ・研究主題と研究内容及び研究全体構造の確認と修正
- ・ピクトグラムに基づいた重点を意識した授業の実践
- ・校内研修の活性化
- ・校内研究の成果と課題の検討

3年次（令和5年度）研究の確立

- ・主体的・対話的で深い学びのある授業の充実・授業の実践と検証
- ・研究主題と研究内容及び計画の確認と修正
- ・ピクトグラムに基づいた重点を意識した授業の実践・深化
- ・校内研究の評価

④研究組織と運営

校内の研究組織を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つのブロックに分ける。通常学級、支援学級で分けることなく、ブロックを構成する。各ブロックで指導案検討やブロック研授業を行う。また、授業公開後には、各ブロックや全体でワークショップ型研修を行い、研究内容の一層の充実を図る。なお、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」は仮説（ピクトグラム）と連動しているが、あくまで重点であり、それぞれが独立した学びではなくつながっているものである。

6. 研究の全体構造

学校教育目標

- 深く学ぶ子～よりよい学習習慣を身に付け、主体的・対話的に深く学ぶ子
- 心豊かな子～よりよい読書習慣を身に付け、感性豊かで明るく思いやりがある子
- 健康な子～よりよい生活・運動習慣を身に付け、健康で安全な生活を送る子。
- 未来をつくる子～夢や希望をもち、他者と力を合わせて粘り強く創造的に行動する子

研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方」
～実現したい子どもの姿(ピクトグラム)を目指した授業づくり～

めざす子ども像①

見通しをもって進んで学ぶ
子ども

(主体的な学び)

めざす子ども像②

他者と関わりをもって自分の
考えを深める子ども

(対話的な学び)

めざす子ども像③

学んだことを次の学びにつ
なげていく子ども

(深い学び)

研究仮説①

主体的な学びが促される
ような単元構成や課題設
定、振り返りを工夫するこ
とができれば、『主体的な学
びのある授業づくり』をして
いくことができるであろう。

研究仮説②

対話的な学びが促される
ような場や状況の設定を工
夫することができれば、他者
との伝え合いを通して、考え
方や感じ方の違いに気づい
たり、自分の考えを見直し
形成したりでき、『対話的な
学びのある授業づくり』をし
ていくことができるであろう。

研究仮説③

考えの広がりや深まりを
実感できる場の設定、連続
性のある学びを工夫するこ
とができれば、学びを自覚
することができ、『深い学び
のある授業づくり』をしてい
くことができるであろう。

研究内容①

- 単元のねらいやつきたい力、領域の特質に応じた見方・考え方を踏まえた単元の学習計画の作成
- 振り返りを大切にした学習過程(①つかむ・見通す②考える・深める③まとめる④確かめる・広げる)の実践と定着
- 振り返りの活用
- 学習規律の定着

研究内容②

- 自分の考えをもって表現(説明)する場の設定。
- ペア学習、交流学习の場の設定(他者との比較及びすり合わせによる児童相互での課題解決。)
- 考えを分かりやすく伝える力の育成
- 相手の意見を、聞き受け止める姿勢の育成

研究内容③

- 考えの変容や新しい気付きを共有する場面の設定
- 主体的・対話的で深い学びを身につけさせる手立てと評価の仕方(ミニテスト、数値目標など)。
- 既習事項等の知識・技能を活用する授業の構築
- 掲示物の共通化。(次の学びにつなげる工夫)

ピクトグラム(主体的な学び)



ピクトグラム(対話的な学び)



ピクトグラム(深い学び)



7. 研究の成果と課題

(1) 仮説1～主体的な学びにかかわって～

《成果》

- 児童と一緒に学習計画を立てる、教科等横断的に授業を構成するなど、学習者中心で考えることで、主体的な学びにつながる。
- 本時の目標に合わせて、資料を効果的に使うなど導入を効果的に工夫することで、見通しをもって活動することができた。
- 本時の目標に合わせてワークシートや板書の内容を精査することで必要十分の内容となり、児童が主体的に考える一助となった。
- 振り返りの書き方、前時の振り返りの扱いを工夫することで、連続性のある学びにつながった。

《課題》

- ▲児童が主体的に取り組む一助とするために、ワークシート、ノート、タブレットを効果的に使い分ける必要がある。
- ▲活動内容や学習内容を精査し、明確にしておかないと、次の活動や学びにつながりにくくなる。
- ▲連続性のある学びにつなげていくため、振り返りは児童の「考え」がどう変化したかを書ける視点を提示する必要がある。

(2) 仮説2～対話的な学びにかかわって～

《成果》

- 対話すること、交流する場を工夫し、丁寧に扱い、繰り返し取り組むことで、自分の考えに自信をもてたり、自分の考えを広げたりすることができた。
- 話型を身に付けることで順序だてて話すことができた。
- 具体物、半具体物を活用することで、多くの児童が自分の考えを表出できた。

《課題》

- ▲より効果的な協働とするために、全体交流の前に聞くポイントを明確にするとよい。
- ▲タブレットを持ち歩いて交流する場合には、システムを明確にする必要がある。
- ▲交流する際、相手へ伝える感想のレベルアップを図ることで、交流の質を上げることができる。
- ▲対話の意図と求めるレベルを、指導者が明確にする必要がある。

(3) 仮説3～深い学びにかかわって～

《成果》

- スプレッドシートでの振り返りは、観点を記入しておくことで、振り返りの視点が明確になった。
- 振り返りの視点を明確にすることで、授業のゴールを児童と共有することができたり、次の時間に生きる振り返りが出てきたりした。
- タブレットを効果的に活用することで、連続性のある学びを構成することができるようになった。

《課題》

- ▲めあてとまとめの整合性を図るだけでなく、見方・考え方をどう解釈して授業に落とし込むかが学びの深まりに関わる。
- ▲授業のまとめを丁寧に扱い、意識づけをすることで、考えを深めたり広げたりすることにつながる。
- ▲めあてからまとめ、練習問題、発展問題に至るまで、授業の整合性を図ることで、学習内容を深めることにつながっていく。

8. 研究資料

望ましい交流の在り方について

2022.2.14
研修部

学習指導要領 解説より抜粋

国語科…「話すこと・聞くこと」に関する指導事項より

社会科…小・中学校社会科において育成を目指す資質・能力「思考力・判断力・表現力等」より

算数科…「数学的活動一覧」より

理科…図3「思考力、判断力、表現力等及び学びに向かう力、人間性等に関する学習指導要領の主な記載」より

生活科…生活科の内容(8)より抜粋

	国語科	社会科	算数科	理科
1学年	互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。	(生活科) 人との関わりの中で、互いの立場や考えを尊重し、目的意識や相手意識をもって多様な方法で交流し合う。	問題解決の過程や結果を、具体物や図などを用いて表現する活動。	(生活科) 情報が一方ではなく、双方に行き来することを大切にす。言葉を中心とした伝え合う活動であるが、表情やしぐさ、態度といった、言葉によらない部分も大切にす。
2学年			問題解決の過程や結果を、具体物、図、数、式などを用いて表現し伝え合う活動	
3学年	目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。	問題解決の過程や結果を、図や式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動	比較しながら調べる活動を通して、自然の事象・現象について追究する中で、差異点や共通点を基に、問題を見だし、表現すること。
4学年				関係付けて調べる活動を通して、自然の事象・現象について追究する中で、既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現すること。
5学年	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。	問題解決の過程や結果を、目的に応じて図や式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動	条件を制御しながら調べる活動を通して、自然の事象・現象について追究する中で、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現すること。
6学年				多面的に調べる活動を通して、自然の事象・現象について追究する中で、より妥当な考えをつくりだし、表現すること。

望ましい交流の在り方

低学年 さまざまな方法や場面で交流することを通して、互いに関心をもち、聞き、双方に伝え合う力を身につける。

中学年 役割や目的を明確にした交流を通して、互いの考えの共通点や相違点に着目し、互いに根拠のある考えを伝え合い、考えをまとめる力を身につける。

高学年 互いの立場や意図を明確にした話し合いや交流を通して、物事を多面的・多角的に考え、議論する力を身につける。

深い学びへのカギは各教科の「見方・考え方を働かせる！」

2022.12.12
研修部

1. 指導要領改訂の基本方針から抜粋

③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

2. 各教科の「見方・考え方」

①国語 言葉による見方・考え方

見方…言葉の意味、働き、使い方等

考え方…対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりする。

語彙にかかわる部分の抜粋

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気づき、語彙を豊かにすること。	オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。	オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。

②社会 社会的な見方・考え方

社会的な事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法」

見方…位置や空間的な広がり

どのような場所にあるか、どのように広がっているか、分布、地域、範囲等を問う

時期や時間の経過の視点

なぜ始まったのか、どのように変わってきたのか、起源、変化、継承などを問う

事象や人々の相互関係などの視点

どのようなつながりがあるか、なぜこのような協力が必要か、工夫、関わり、協力などを問う

考え方…比較・分類したり総合したりする。

どのような違いや共通点があるかなど

地域の人々や国民の生活と関連付ける。

どのような役割を果たしているかなど

③算数 数学的な見方・考え方

見方…事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着目してその特徴や本質を捉えること。

考え方…目的に応じて、数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能等を関連付けながら、統合的・発展的に考えること。

④理科 理科の見方・考え方

見方…エネルギー領域 主として量的・関係的な視点

粒子領域 主として質的・実体的な視点

生命領域 主として共通性・多様性の視点

地球領域 主として時間的・空間的な視点

その他 原因と結果の視点 部分と全体の視点、定性と定量的視点 等

考え方…第3学年 比較する「複数の自然の事物・現象を対応させ比べる」

第4学年 関係付ける「自然の事物・現象を様々な視点から結びつける」

第5学年 条件を制御する「自然の事物・現象に影響を与えると考えられる要因について、どの要因が影響を与えるかを調べる際に、変化させる要因と変化させない要因を区別する」

第6学年 多面的に考える「自然の事物・現象を複数の側面から考える」

⑤生活科 身近な生活に関わる見方・考え方

見方…身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのか

考え方…自分の生活において思いや願いを実現していくという過程にあり、自分自身や自分の生活について考えていくこと

3. 深い学びに関わる白蘭小ピクトグラム

	思考して問い続ける。		知識・技能を習得する。
	知識・技能を活用する。		自分の思いや考えと結びつける。
	知識や技能を概念化する。		自分の考えを形成する。
	新たなものを創り上げる		

4. 終わりに

教科の見方・考え方に関わって、今回の指導要領改訂でいちばん大きく変わったのは、見方・考え方を「働かせる」という表現です。これまでも、見方・考え方についての記載はありましたが、見方・考え方を「養う」あるいは「育成する」といった表記だったかと思いますが。

指導要領改訂に伴い、各教科等の見方・考え方を働かせて考えたり、表現したり、判断したりすることが求められるようになりました。そして、指導要領解説には、前述のとおり「深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること」との記載があります。

各教科等の見方・考え方については、指導要領解説ごとに表現の詳細さは変わり、教科等のすべてで同じレベルで記載されているわけではありません。例えば、国語科はざっくりと「言葉による見方・考え方」であるのに対し、理科では見方は領域ごとに、考え方は学年ごとの活動の重点として記載されています。これを機に、各教科等の指導書や朱書き等で見方・考え方に関わる記載を探してみてください（そして、見つけたらぜひ藤原へ教えてください）

各教科等の見方は問題を捉える視点であり、考え方は問題を解決するための方法です。これらを生かして授業を構築する、問いを考える、疑問を生み出す等が深い学びへの近道なのだと考えます。こう考えると、これまでは無条件に低学年は無理なんじゃない？と思っていましたが、学年を問わずその学年に応じた深い学びに取り組むことができるのだと考えられるのではないのでしょうか。ぜひ、授業づくりの参考にしてください。

1. 研究主題

自らの課題に気づき、主体的に学習する生徒の育成

2. 主題設定の理由（目的）

本校で取り組むべき課題は2つある。1つ目は、特別支援に在籍する生徒の増加と、それに限りなく近い生徒がいることについての手立てである。協働学習を効果的に活用するとともに、個の課題や、発達段階のニーズに応じた支援の工夫をする必要がある。2つ目は、目まぐるしく変化する社会に対応するために、自ら考えて主体的に学習することのできる生徒の育成である。実践相互交流を生かし、教育理念や生徒指導の手法、ツールなどの交流を活発に行う。

3. 研究の内容

(1) 方法

本校では、令和3年度までの研究に区切りをつけて、令和4年度から新たな研究がスタートした。

令和4年度では、「主体的に学習する生徒の育成」はもちろん、教職員が一丸となって研究・研修に臨めるように、「グループ研修」や「Chromebook 等の ICT 機器の活用」に力を入れることにした。

令和5年度は上記内容を継続するとともに、「主体的に学習する」「支援が必要な生徒への手立て」「ICT の活用」を重視した授業づくりに、各教科で意識して取り組む。

「グループ研修」

目的：教職員のスキル向上を目指し、グループごとに課題を共有し解決する。

《例》「Chromebook の有効活用をしたい」→Chromebook を活用している先生の授業を参観し、自身の授業に取り入れる。「このような活用をしている」「このように活用してみたい」などの意見を交流し、一つでも多くのスキルを身に付ける。

方法：5～6グループ編成で「まなびポケット」「インクルーシブ」などのテーマを決定し、それについて協議し実践を行う。研修部として開催日時を設定しているが、必要に応じて集まって開催してもよい。

「Chromebook 等の ICT 機器の活用」

目的：教職員の Google Chrome (Chromebook) におけるスキル向上

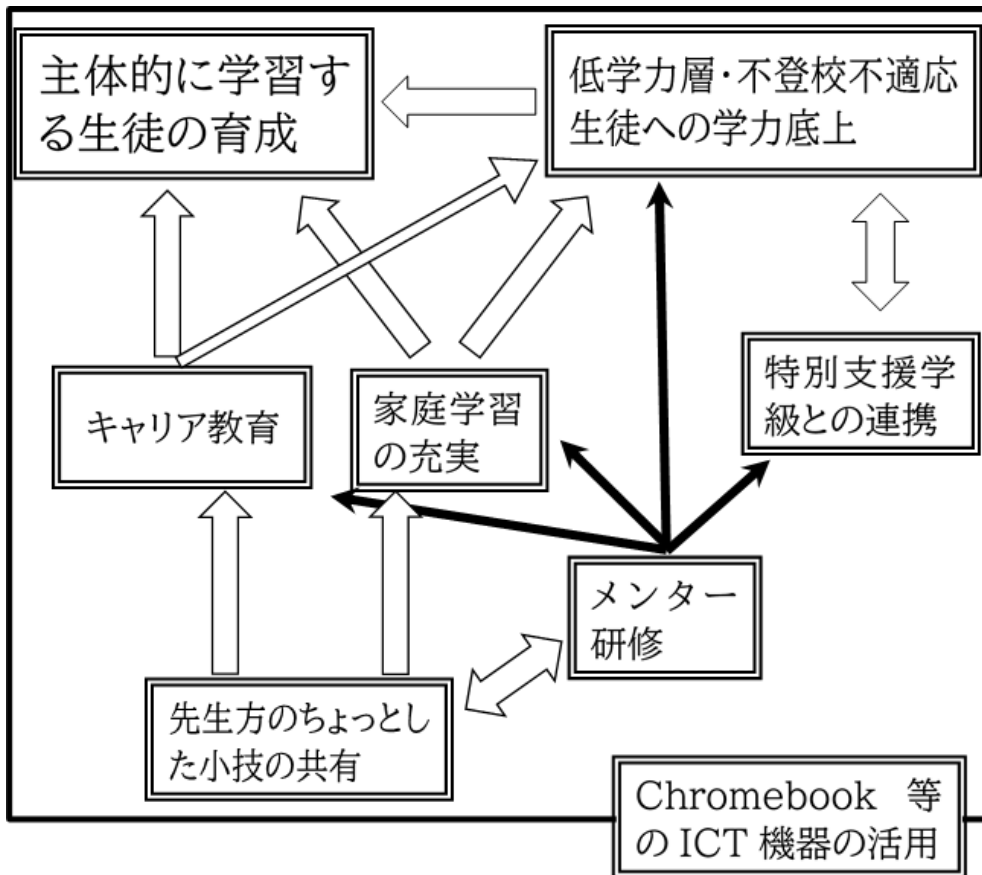
方法：ICT 担当者（教員）が Chromebook についての実技研修を行う。

（8月には、WinBird の操作方法について説明、実技研修を行い、具体的な活用方法や注意点などについて確認を行った。

(2) 計画

下記のように図式化し、研究全体がどのような関連性を持ち合わせているかを明確にした。「主体的に学習する生徒の育成」を達成するための手立てをそれぞれ示している。

自らの課題に気づき、主体的に学習する生徒の育成



(3) 実践

I 校内研究会（7月）について

学年・学級	教科	場所	単元名	授業者
3年4組	数学	多目的室5 多目的室2	平方根の利用	石黒晋 荒井敏美
3年5組	理科	理科室	遺伝の規則性	秋田朋一
1年3組	技術	技術室	生物育成の技術による問題解決	荒井香織
支援学級	生活単元	支援1・2教室	「夏のかざり」をつくろう	飛谷ゆかり 三松千香

各教科「主体的に学習する授業の工夫」「低学力層への支援・手立ての工夫」「ICT機器を活用した授業の工夫」を視点にして授業を行った。

【数学の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・やってみたい、わかるようになりたいという動機づけがある。(主体的に)
- ・ICTを用いるだけでなく、発表があることで表現力が養われる。(ICT)

<改善点>

- ・習熟度別に分けているが、同じクラスでも学力に差がある。(支援)

【理科の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・授業者ではなく生徒の言葉で前時の復習を行うことで、他の生徒も集中して聞けるため、理解がさらに深まった。(主体的に)
- ・学習内容がワークシートに記入されることで、低学力の生徒も理解を深めることができていた。(支援)

<改善点>

- ・プロジェクター使用時に文字が見えにくいところがあった。(ICT)

【技術の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・やることがわかっているので生徒が戸惑うことなく動きがスムーズであった。(主体的に)
- ・口頭の説明だけでなく、図があるのがわかりやすい。(支援)

<改善点>

- ・ICTと作業を同じ時間に実施する時が大変そうだった。(ICT)

【特別支援(生活単元)】

<良い点>

- ・発言がなかなかできない子に自信を持たせられるような声かけがありよかった。(支援)
- ・前時に出し合った意見を振り返りやすい。(ICT)

<改善点>

- ・一人ひとりがまず入力する時間を取った方が発言の苦手な生徒にとってはよかった。(主体的に)



II 公開研究会（10月）について

学年・学級	教科	場所	単元名	授業者
1年4組	国語	1年4組	「言葉」をもつ鳥、シジュウカラ	高橋敏男
2年1組	社会	2年1組	中国・四国地方	松田朗
1年5組	体育	多目的ホール	柔道	永井一之
1年2組	英語	1年2組	Program6 The Way to School	佐々木ななみ

【国語の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・授業者の説明が端的でただの作業になっていない。
（主体的に）
- ・個別最適な学びとして早く活動が終わった班はスマイルネクストなどに取り組んでいて時間が有効に活用されていた。（ICT）

<改善点>

- ・最後の発表は特定の子に限られていた。低学力層を巻き込むためにはどうしたらよいか。
（支援）



【社会の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・本文に書いてあることでも理解していない生徒たちが多く、ペアで話すことで理解が深まることを目指している。（支援）
- ・授業者が話す時間が少なく生徒自身に考えさせる授業になっていた。（主体的に）

<改善点>

- ・書いてある意見が見えることで意見が偏る。（ICT）



【体育の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・グループ内の交流では多くのポイントが出されていた。（主体的に）
- ・支援学級生徒が前向きに取り組む雰囲気があった。（支援）

<改善点>

- ・ネットワーク環境の悪さへの事前対策(オフライン使用を準備しておく)。（ICT）



【英語の分科会での話し合い】

<良い点>

- ・「自分の好きな映画」という話しやすいテーマ設定で取り組みやすかった。（主体的に）
- ・Jamboardで書いた英文を添削しているのが良かった。（ICT）

<改善点>

- ・ディクテーションで書けた生徒とそうでない生徒の確認をするとスタート位置がわかりやすい。（支援）



Ⅲ グループ研修の様子

二期に分けてグループ研修を実施した。

【第1期】

期間：6月19日（月）～9月19日（火）

※当初の予定では8月17日（木）までの期間

グループ：『まなびポケット活性 Gr』、『スマイルネクスト活性 Gr』、『Google アプリ活性 Gr』、『インクルーシブ活性 Gr』、『主体的に学ぶ手立て活性 Gr』、『入試分析 Gr』

内容：それぞれで「グループの目標」「6月から8月までの予定」「8月までにグループで実践すること」などを学年・教科などの隔たりなく交流した。



『まなびポケット活性 Gr』について

計画：チャンネル内でクイズを作れるようになり、問題を解かせ分析ができるようにする。

成果：Google フォームよりも扱いやすく、作業が簡単にできることがわかった。

課題：良いところは多々あるが、スマイルネクストなど媒体がたくさんあると混乱してしまう。



『スマイルネクスト活性 Gr』について

計画：ドリルを生徒に配布して成果を確認し、生徒向けのアンケートを実施する。

成果：生徒にとってはおおむね好印象だった。

課題：書くことが必要な教科では物足りなさを感じる生徒もいた。



『Google アプリ活性 Gr』について

計画：それぞれが使用しているサイトやアプリを交流する。

成果：プラットフォームエデュケーションというアプリの活用が進んだ。

課題：生徒が Google マップや Google アースを使用できるようになると便利だ。

『インクルーシブ活性 Gr』について

計画：生徒の特性を共通理解していく。

成果：これまでのデータを蓄積することができた。

課題：他学年の生徒の名前と顔が一致するようにファイルを作る。

『主体的に学ぶ手立て活性 Gr』について

計画：生徒が“やってみよう”となる授業を実践する。

成果：レベル別に課題を出し、自分のペースで進めることでやってみようという気持ちになった。

課題：できる生徒とできない生徒の差が大きく課題の設定が難しい。

『入試分析 Gr』について

計画：今生徒に求められている資質・能力を活かせる資料を作成する。

成果：社会を除く4教科で分析を行い、4ページ分の資料を作成することができた。

課題：分析した上で、授業改善につなげていく必要がある。



【第2期】

期間：11月20日（月）～継続中

内容：第1期とは異なり、教職員をグループに分けてから、グループごとにテーマを決定し、より深く専門的な話し合いを行う。

4. 成果と課題

（1）成果

「自らの課題に気づき、主体的に学習する生徒の育成」3年計画の2年目として、校内・公開研究会、グループ研修等を進めてきた。

校内・公開研究会では、合わせて8つの授業を行った。「主体的に学習する授業の工夫」「低学力層への支援・手立ての工夫」「ICT機器を活用した授業の工夫」の3つの観点を意識しながら指導案を作成することができた。特に「ICT機器を活用した授業の工夫」においては、前年度よりも飛躍的に向上することができた。

また、グループ研修では前年度とは異なるグループを作成し、スキルアップのための話し合いがなされた。

（2）課題

「主体的に学習する生徒の育成」のために、様々な観点からアプローチすることができていた。ただし、「主体的」ではなく「自主的」になっている場面も見られたため、「主体的」とは何かをもう一度確認する必要がある。また、「自らの課題に気づき」の部分があと一歩達成されていない。そのため、来年度（3年計画の3年目）はどのような手立てで課題に気付かせるか、自らの課題とは何なのか、について研究していく必要がある。

室蘭市立みなと小学校（室蘭市パイロットスクール事業研究指定校）

1. 研究主題・副主題

読解力と表現力を育む説明文の学習指導の工夫
（特別支援学級：読解力と表現力を育む国語科の学習指導の工夫）
～指導事項を焦点化した課題設定を通して～

2. 研究主題・副主題の設定理由

（1）児童の姿から

令和3年度まで3年間、「児童が主体の授業の確立」という主題のもと、国語科・算数科の2教科の授業づくりを通して研究を進めてきた。その中で、自分の考えを話したり書いたりすることに対する児童の苦手意識が薄れ、意欲的に表現する姿が見られるようになった。

しかし一方で、主に国語科の研究では、言葉で表現するための語彙力や、書く文章の質に関しては課題が残った。日常の児童の姿からも、自分の思いや考えを論理的に説明する力が十分とは言えない。また、全国学力・学習状況調査の結果等から、本校児童は算数科において、文章題の内容を正しく読み取り立式する力に課題があることが明らかとなった。

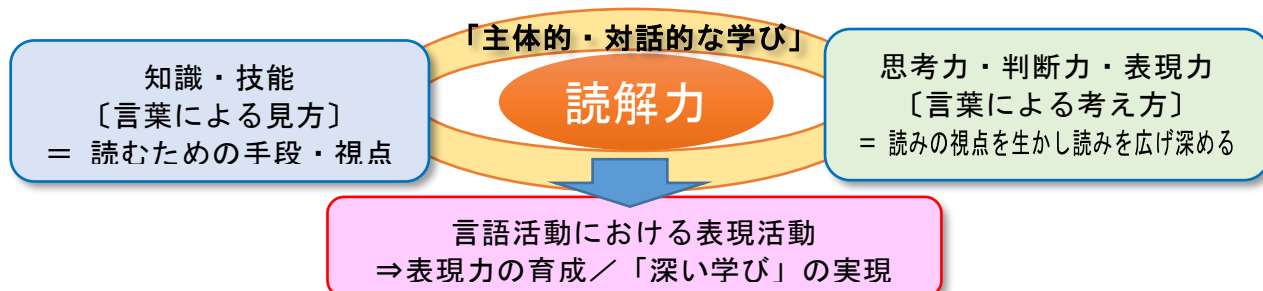
そこで、昨年度より3年間は、全ての学習における言語活動の根幹を担う国語科の授業改善に取り組むこととした。児童の読解力を育むために、説明文の「読むこと」の授業において、児童が単元の指導事項を確実に身に付けさせ、それを活用して読む力を育む工夫について研究を行う。その工夫の一つとして、今年度は課題設定に重点を置き、児童が主体的・対話的に指導事項について学習していくことができる授業づくりを目指す。また、教材文の読みを深めることで、児童が話したり書いたりして表現する言語活動を充実させ、児童の豊かな表現力を育むことを目指す。

なお、特別支援学級においては、児童の実態を考慮し、物語文も含めた「読むこと」の授業づくりを通して、読解力の育成を目指す。

（2）読解力について

学習指導要領では、各教科において「見方・考え方（各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方）」を鍛え、「主体的・対話的で深い学び」を充実させることが求められている。その中でも、物事を見たり考えたりするための道具である言語を学ぶ教科である国語科は、「見方・考え方」の中核的な役割を果たすとされている。国語科の授業においては、「言葉による見方・考え方」を働かせることが求められる。

本校児童の読解力を高めるためには、まず「言葉による見方」を獲得させる必要があると考える。そこで、児童が文章を読み取るために各学年段階で指導すべき事項を、単元もしくは年間を通して確実に指導を行う。そして、それらの指導事項を生かして教材文の読みを広げ深める学習活動を展開することで、単元末の言語活動への意欲を高め、表現力を育む。この一連の学習活動を通して、児童の「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。



4. 研究内容

(1) 具体的方策

①指導事項を具現化するため活動・環境の工夫

単元および本時で指導すべき事項を明確にし、それを具現化するための効果的な学習活動を設定する。その際、他学年との系統性や、教材のもつ特性を考慮し、活動を工夫する。

また、指導事項について単元全体を通して継続的に指導を行うために、児童が指導事項を意識しやすい環境を整える。具体的には、学習用語や学びの手立てを掲示したり、指導事項を意識しやすいような板書やワークシートを活用したりすることなどが考えられる。

②指導事項の定着を図るための課題設定

本時で定着させたい指導事項を活用して、児童が主体的・対話的に学ぶことができるような学習課題を設定する。

「～を読み取ろう」「～について考えよう」といった広い課題ではなく、「なぜ、～だろうか」「どちらが～だろうか」といった、文章の内容や筆者の考えに迫った学習課題の設定を基本とする。これにより、児童一人一人が考えをもち、その根拠となる叙述について指導事項に着目・活用しながら、児童が主体的・対話的に学ぶことができるようにする。

例) ・なぜ筆者は事例1を挙げたのだろうか。(事例1は必要だろうか。)

・事例の順は、これが適切だろうか。(なぜ、この順に挙げているか。)

ただし、学習内容の都合上、課題の語尾が上記のように設定することが難しい場合もあるため、その場合は児童が課題意識をもって学習できるよう、学習の導入や教師の問いかけを工夫する。

(2) 研究計画

本研究主題のもと、3か年計画で研究を進めている。

1年目 (令和4年度)	・研究理論を構築し、研究計画を立てる。 ・主に読解力の育成に主眼を置いた授業研究を行い、具体的方策の検証に取り組む。
2年目 (令和5年度)	・研究理論を整理し、具体的方策の見直しを行う。 ・読解力の育成を目指し、研究を深める。 ・公開研究会を開催する。
3年目 (令和6年度)	・指導事項を生かして表現する活動の充実に向けた研究を深める。 ・研究の成果をまとめる。

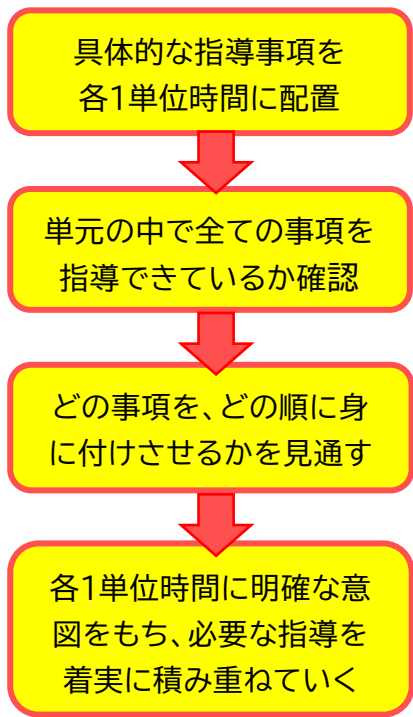
(3) 指導案

①単元の指導計画

指導案の「単元の指導計画」の表の中に、「◆指導事項」という項目を設定した。

単元の中で児童に身に付けさせるべき指導事項を明確に挙げ、それを各1単位時間の指導計画に明記することで、挙げた全ての指導事項を単元の中で指導できるか確認できるようにした。

この作業を通して、本単元で扱う読解力について、単元全体でどのような手順で身に付けさせていくか、指導者自身が見通しをもって指導することができた。



時	学習活動	指導の留意点・手立て ◆指導事項	
1 時	○単元の学習課題を確認し、学習計画を立てる。 ○『見立てる』を読み、話題と構成を確かめる。	・「要約」と「要旨」の違いを確かめる。 ・文章構成図を活用し、構成を視覚的に捉えやすくする。 ◆「要旨」「構成」「事例」の意味を知る。	【態】 をもち
2 時	○前時に検討した構成をもとに、『見立てる』の要旨を捉える。	・「初め」と「終わり」に筆者の考えが書かれている構成の特徴に気付かせ、双括型の構成について知らせる。 ◆要旨の捉え方が分かる。 ◆双括型の構成を知る。	【思】 えて
3 時	○『言葉の意味が分かること』を読み、話題と構成を確かめる。	・『見立てる』の構成と照らし合わせながら、文章の構成を確かめる。 ・取り上げられている事例について、大まかに捉える。 ◆双括型の構成を捉える。	【思】 えて
4 (本時) 時	○「中」の事例の取り上げ方、役割や関係を捉える。	・「中」がいくつの事例に分かれるか検討することで、事例のまとまりや、「原因」と「結果」の関係に気付かせる。 ・p.57「情報 原因と結果」を活用し、理解を深める。 ◆事例がいくつ挙げられているか読み取る。 ◆「原因」と「結果」の関係を捉える。	【知】 つい
5 時	○筆者の考えを捉え、要旨を捉える。	・「初め」と「終わり」のどちらに筆者の考えがより込められているか検討する。 ・「初め」と「終わり」繰り返し使われている言葉をキーワードとして抽出する。 ◆要旨の手がかりとなる言葉を捉える。	【思】 叙述 体の 把握

②本事案

本時の指導事項に対して、どのような活動を設定して具現化していくか記載することで、本時の活動の意図を明確に意識して指導案を作成することができるようにした。

5. 本時案		
(1) 本時の目標 (4/8)		
事例のまとまりを捉え、原因と結果の関わりについて理解することができる。		
(2) 本時の指導事項を具現化するための活動の工夫		
「中」を3つのまとまりに分ける活動を通して、「結果」と「原因」が相互に働いて事例を詳しくするという論じ方の特徴について児童に気付かせる。		
(3) 本時の展開		
領域	学習活動	教師の手立て

(4) 実践

①指導事項を具現化するため活動・環境の工夫

児童に読み方を選択させ、最後に比較させる工夫

第4学年「うなぎのなぞを追って」の実践では、「年月」「場所」「大きさ」の3つの中から自分の興味をもった項目を選び、それぞれその視点で文章を読むという活動を取り入れた。児童が自分で視点を選択することで、より主体的に読むことができるようにした。

また、同じ視点をもった児童でグループ交流をすることで、個別の思考の足りなかった部分を補い、読みを深めることができた。

さらに、全体交流では、全てのグループの代表の発表に対し、授業者が言葉かけや評価を行いながら板書に整理し、それぞれの視点で読む中での気づきを共有していった。代表ではない児童の気づきや考えも次々と発表させたことで、同じ文章でも読む視点が異なると読み取れる内容も異なることに気付くことができた。

同じ活動を積み重ねる工夫

第2学年「どうぶつ園のじゅうい」の実践では、「自分の経験と結び付けて感想を書く」という指導事項を具現化するために、単元末に獣医さんへの手紙を書いて交流するという活動を設定した。そこにつなげるために、各段落の内容について読み取る段階において、獣医さんへの手紙を毎時間書いて蓄積していく活動を取り入れた。

文章の内容や、それにかかわる自分の経験は段落ごとに異なるが、同じ活動を設定することで児童が学習活動への見通しをもつことができ、自ら学習を進めていく姿が見られた。

ワークシートの工夫

【全文プリント】

第6学年「固有種が教えてくれること」の実践では、本論のそれぞれの事例に見出しを付けるという活動を行う際、児童の思考を助ける手立てとして、教材文を1枚のシートにまとめた「全文プリント」を活用した。この「全文プリント」については、

- ・文章全体の構成を捉えやすい。
- ・ページをめくる手間がなく、他の段落と内容を比較しやすい。
- ・児童が印などを気軽に書き込むことができる。
- ・図表などの資料を省くことで、資料のよさに気付くことができる。

といった点で効果的であり、本校の他の実践においても活用されている。

【短冊シート】

第6学年「時計の時間と心の時間」の実践では、児童が「中」の事例がどのような順序で挙げられているかを考える手立てとして、段落ごとに教材文が書かれた短冊を配付した。児童は、短冊を動かして順序を並べ替えながら自分の考えをもったり、それをもとにグループで話し合いをしたりして、児童が学習課題の解決に向かう上で効果的に活用されていた。



掲示物

【前時までの学習が一目で分かる掲示】

第2学年「かくれんぼ」の実践では、4つの鬼遊びの【遊び方】と【面白さ】について、各段落での叙述を比較しながら読み取る際に、前時までの学習内容が一目で分かる大きな表を掲示した。授業の導入や、全体交流の場面において、授業者がこの掲示物を活用しながら学習内容を確認していくことができ、単元の学習のつながりを意識することができた。また、個人思考の際に掲示物を見て振り返る児童もいて、ここにも掲示の効果が見られていた。



掲示物を活用し、前の段落までの叙述を振り返りながら学習を進めることで、児童も指導者も常に指導事項に沿って学習を進めることができた。

ICT

【スプレッドシートを活用した振り返り】

第2学年「どうぶつ園のじゅうい」の実践では、授業終末の段階で、Google スプレッドシートを活用した学習の振り返りを行った。低学年児童でも簡単に振り返りができるよう、プルダウンで3段階から選択する方法で、児童が本時の課題に対してどのように学習できたか自己評価できるよう工夫した。毎時間の振り返りを行うことで、児童が単元を通して主体的に学習に取り組めるようにした。

どうぶつ園のじゅうい 振り返り		振り返り			
大きなあて	みにつけたい				
自分のけいけんを振り返る。	自分のけいけんを振り返って、かんそうを書く。				
学習のめあて	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り
1 次しよのめあてをきく。	次しよのめあてをきく。	次しよのめあてをきく。	次しよのめあてをきく。	次しよのめあてをきく。	次しよのめあてをきく。
2 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
3 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
4 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
5 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
6 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
7 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
8 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
9 じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。	じゅういせんどうしよのめあてをきく。
10 さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。
11 おまわりをきく。	おまわりをきく。	おまわりをきく。	おまわりをきく。	おまわりをきく。	おまわりをきく。
12 さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。	さいごのめあてをきく。

具体物の活用

特別支援学級「馬のおもちやの作り方」の実践では、空き箱を組み合わせたおもちやの作り方が書かれた文章の内容を読み取るために、授業者が実際に箱を提示し、どの向きに箱を組み合わせるか叙述をもとに児童に説明させる工夫を取り入れた。この活動は、文章の内容理解を容易にすただけでなく、児童が説明文を詳しく記述する必要性に気付くことができた。



多様な考えに触れるための工夫

【少人数でも他の意見に触れる機会の設定】

特別支援学級「ちいちゃんのかげおくり」の実践は、2名の児童での学習であった。「登場人物にとってどちらの場面の方が幸せだったか」という課題に対して、児童はそれぞれに考えをもつことができ、互いの考えを交流することで文章を深く読み取ることができた。その後、多様な考えに触れさせ、さらに考えを深めさせるために、校内の数名の教職員にアンケートを実施し、その中からいくつかを読み上げた。複数の考えを聞くことで、少人数の学級でも「自分の考えと似ている」「場面は同じだけど理由が違った」「自分とは全然違う考えがあった」という感想をもつことができ、読み取りを深めることができた。

②指導事項の定着を図るための課題設定

段落をどこで分けるかを問う課題

第5学年「言葉の意味が分かること」の実践では、「中」の各段落のもつ役割として、「原因」と「結果」の関係を児童に気付かせるために、「『中』を3つに分けるとしたら、どこで分けられるだろうか。」という課題を設定した。

導入から「原因」「結果」というキーワードを提示することなく、児童がどこで段落のまとまりを区切るか議論することを通して、各段落のもつ役割に自然と着目していくことをねらい、課題を設定した。児童は、各段落の内容や接続語等の叙述を根拠として「中」を3つのまとまりに分けていく中で、段落どうしがもつ関係性に気付くことができた。

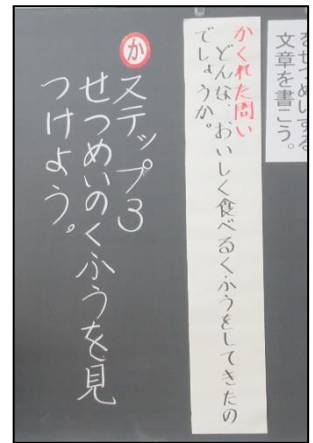


学びの見通しをもたせる課題設定

【「単元のめあて」と「本時の課題」の設定】

第3学年「すがたをかえる大豆」の実践では、単元の導入時に、「友達に食べ物のひみつを教えよう」という単元全体のめあてを提示した。その上で、それぞれの授業の課題に「ステップ〇～」と冠することで、単元全体のめあての達成のために学習を積み重ねていくという意識を児童がもつことができるよう工夫した。

各単位時間を、単元で身に付けさせるべき指導事項を1つずつ身に付けていくステップと捉えることは重要であり、それを児童と共有していくことも効果的な手法であると考えられる。



(5) 成果と課題（公開研究会でいただいたご意見・ご感想より）

①指導事項を具現化するため活動・環境の工夫

- 低学年や特別支援学級では、具体物の提示により言葉や文章内容への理解が深まった。
- ワークシートの文に線を引かせることは、長い文章を読み取る上で効果的だった。
- クラゲチャート等の思考ツールを活用し、思考を言語化する前に可視化することで、児童は考えを整理してから言語化できるので、低位の児童にとっても効果的であった。
- ICTとワークシートの併用で、児童が主体的に事例を読み取ることができた。
- 児童が音声入力したものをテレビに映して評価・添削する方法は、児童がアウトプットしたものを授業者がその場でフィードバックできるので、子どもに力が付く。
- 具体物は分かりやすいが、国語科の授業では本文や挿絵に立ち返ることも必要。文章だけでは分からなかったことを確かめるために、後で提示すると効果的である。
- 複合単元では、本時の学習が後半の書く活動にどうつながるか分かる掲示があるとよい。
- 低位の子たちへの活動・環境の配慮を今後考えていくとよい。
- Winbird、スマイルノート等を用いて、他の児童（班）のシートを見ることができれば、自分の考えを書ける児童が増えるのではないかな。
- ICTの活用は、多様な考えが出てくる場面や、協働的な学びに結び付けられる場面で有効である。個別最適な学びと、協働的な学びの一体化を考えるならば、ワークシートで考える児童や、ICTを使う児童、友達や先生と一緒に考える児童など、自分に合った学び方を選択し、その後の協働的な学びにつなげるも有効。アナログとデジタルを効果的に選択していくことが大切。

②指導事項の定着を図るための課題設定

- 課題設定を工夫することで、軸がぶれずに授業が進んでいた。
- 単元の指導計画や本時の課題を児童と繰り返し確認し、学習のゴールを明確化することで、児童の主体的な学びにつながった。
- 児童は課題に対し、「なんでだろう」と意欲的に活動していた。
- 振り返りの場面で、児童は「楽しかった」等ではなく、課題に即した振り返りを書くことができていた。児童が課題を意識して学び、資料の効果を実感していた。
- 活動と課題がマッチしていない場合があった。
- 指導事項の系統性を意識し、学年段階に応じた課題になっているか確認するとよい。
- 課題を児童が見付けられるような手立てがあるとよい。

1. 研究主題・副主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

～ ICTの効果的な活用を通して ～

2. 主題・副主題設定の理由

（1）学習指導要領の趣旨から

少子高齢化、情報化、グローバル化、人工知能の発達などの社会的な変化は加速度を増し、将来を予測することが困難な時代となっている。このような時代だからこそ、子どもたちには多様な人々と協働しながら、よりよい社会や幸福な人生の創り手となるような資質・能力を身に付けることが求められている。

学習指導要領では、その資質・能力を「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力・人間性の涵養」と位置付け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、それらの育成、涵養を図ることを目指している。

本校としても、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業の改善、工夫に努めたい。

（2）教育目標の具現化の視点から

本校では、教育目標（期待する生徒像）『進取：深く考え進んでやりとげる生徒』、『協調：温かな心で助けあえる生徒』、『自律：心とからだの強い生徒』の具現化を図る手立てとして、求める学校像、教師（組織）像、生徒像を掲げるとともに、研究主題を実践的に追求し、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成を目指してきた。また、今年度の学校共通としての課題に「主体的・対話的で深い学びを実現する環境の整備と授業改善」を掲げ、各教職員が研修に努めながら、常に授業改善、自らの資質向上に取り組んでいる。本研究を推進することで、学校の教育目標達成の一助としたいと考えている。

（3）これまでの研究から

本校では、一昨年度から「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のために、ICT環境整備に取り組んできた。教師・生徒が「いつでも、どこでも使える環境」の整備を行ったことで、生徒がChromebookを利用する一日のパターンが定着し、授業で活用することが当たり前となった。また、教室にマグネットスクリーンシート、プロジェクターを常設したことで、教師がChromebookを授業に持参し、様々な映像や画像を映し出し、生徒の興味・関心を引き出す機会が多くなった。

本校は今年度、研修の3年計画の2年目を迎える。昨年度までの成果を踏まえて、これまでの取組を継続して実践・検証していくとともに、Chromebookをより効果的に活用し、生徒のさらなる学力充実を目指した授業づくりの研修を進めていく。

3. 研究の仮説

本研究を進めるにあたって、次のような研究仮説を設定し、実践、検証をしていきたいと考える。

〔仮説 1〕

各教科の見方・考え方に関わる用語（以下「キーワード」）を使う言語活動を充実させることで、生徒は学習内容を理解し、それらを表現する力をつけることができるであろう。

（Chromebook 活用の模索）

〔仮説 2〕

生徒の適性や実態に基づいて、ICT機器を活用した単元を設計することで、生徒は、学習内容を理解することができるであろう。

4. 研究の視点と研究内容

研究の仮説の実践・検証のために、以下の2点を研究の視点・研究内容として設定した。

【研究の視点 1】 キーワードを用いた言語活動の充実

【研究内容 1】 ○キーワードを積極的に用いた、学習内容の説明や学び合いの実施

（Chromebook 活用の模索）

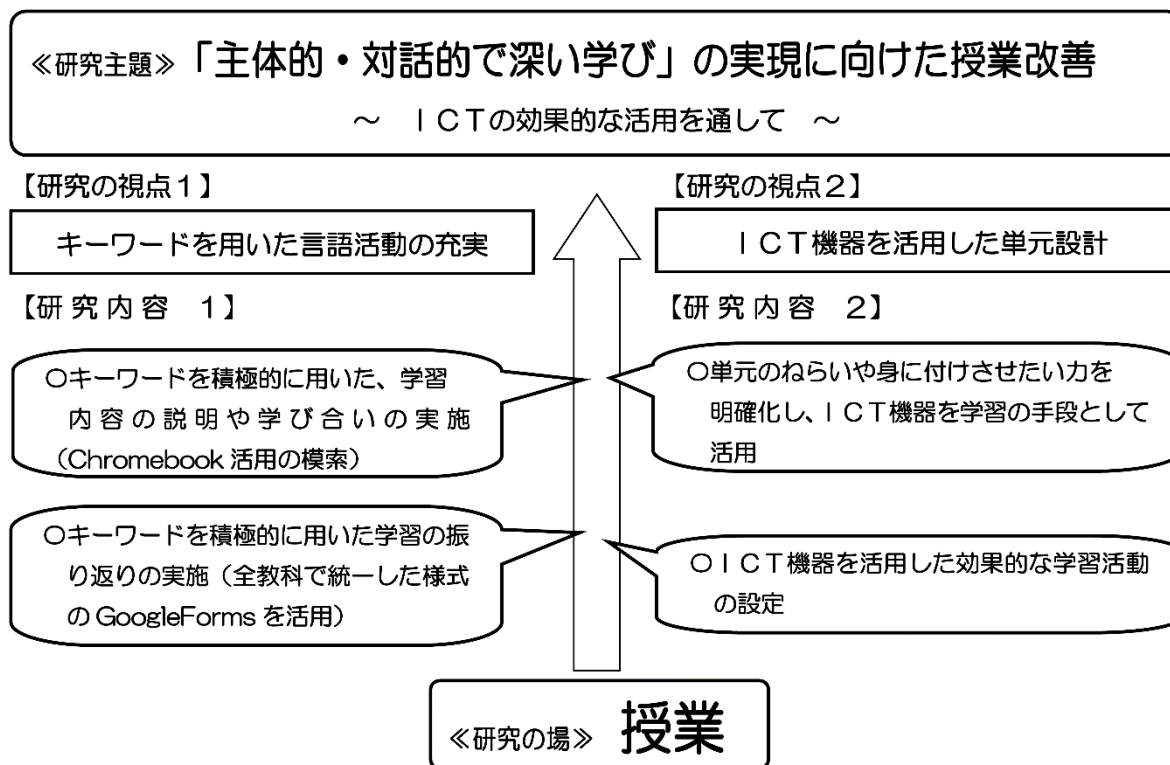
○キーワードを積極的に用いた学習の振り返りの実施

（全教科で統一した様式の GoogleForms を活用）

【研究の視点 2】 ICT機器を活用した単元設計

【研究内容 2】 ○単元のねらいや身に付けさせたい力を明確化し、ICT機器を学習の手段として活用する。

○ICT機器を活用した効果的な学習活動の設定



5. 東明中学校 ICTの実践について

生徒の「1人1台端末」をはじめとするGIGAスクール構想の実現に向け、ChromebookやICTの積極的な活用による授業や業務の改善のために、教員がいつでもどこでも使えるICT環境の整備と、研修を日常化するために以下のような取組を進めてきた。

(1) 教室環境の整備

教員がChromebookやICT機器を持ち歩き、すぐに接続して使用できるように、各教室に右のような単焦点プロジェクターとHDMIケーブル、キャスター付きのプロジェクター台を設置した。また、ホワイトボードマーカーで直接書き込めるマグネットスクリーンを黒板半分に設置している。



単焦点プロジェクター



Chromebookと書画カメラなど、2台の機器を併用する場合はHDMIセレクトを使用し、ワンタッチで切り替えができる。

単焦点プロジェクターは黒板との距離が近くても投影可能。プロジェクターはキャスター付き台に設置し、簡単に移動できる。

○テレビモニターと比較した場合

利点・大きく、後ろの席からでも見やすいこと。

- ・映した映像に、マーカーで直接書き込み解説などができること。

課題・板書のスペースが黒板の半分に限られること(マーカーでスクリーンを黒板のように使用することは可能)。

- ・屋外が明るい日は、光量の関係でスクリーンが見にくいことがある。

また、オンライン授業への対応のために、三脚とChromebookホルダーを用意した。教卓や机の上にChromebookを置かないので、教師が教卓を広く使いながらChromebookで黒板を映し出すことができる。



(2) 研修の日常化

① ICT実施報告シートの作成

各教員が行ったICT実践例を蓄積・分析するためのスプレッドシートを翔陽中学校での実践を参考にして作成した。教員は自らが行ったICTの指導実践を順次記入する。他の教員が行った実践例をいつでも見て、参考にできる。蓄積されたデータは傾向や使用例を分析し、今後の学習や業務の改善に活用する。

学習場面分類	活用科目	活用科目	※	※	活用場面(活動名など)	活用方法の説明
A1教員による教材の提示	0	国語		2学年	古文の説明 要約	スクリーンに古文を投影し、そこに書き足していつでも書き換えられる。
A1教員による教材の提示	業務の効率化	0	国語	3学年	聞き取りテスト	ワークの出版社のサイトにあげられている音声データをプロジェクターで流す
B1個に応じた学習	業務の効率化	0	国語	3学年	単元テスト	フォームで単元テストを行った。
業務の効率化	0	国語		2学年	回答の集計	テストなどのアンケート等を集計。
A1教員による教材の提示	1	社会		3学年	動画	資料として、動画(nhk for school)を全体で見た。
A1教員による教材の提示	1	社会		1学年	実物投影機	実物投影機で教科書などを拡大
B1個に応じた学習	4	社会		4学年	実物投影機	実物投影機で教科書などを拡大

② 授業交流週間の設定

お互いの授業を気軽に見合い、参考にできるように「授業交流週間」を設定した。略案等は作成せず、途中退室も可とした。本校の研究のテーマである「言語活動を効果的に行っているか」、「ICT機器の活用を意識した授業となっているか」を意識し、右のような「気づきカード」に記入し提出してもらった。

記入者氏名

2022 授業交流週間 「気づきカード」

※「気づきカード」は授業を参観された方は必ず書いてください。書いた後は一度「研修係」まで提出をお願いします。

1. 参観された授業

2. 授業を参観しての気づき

3. 授業者へ一言&研修係へ「授業交流週間」に関するご意見

(3) 指導案例(一部)：令和5年11月2日(木) 理科 上原智恵美教諭

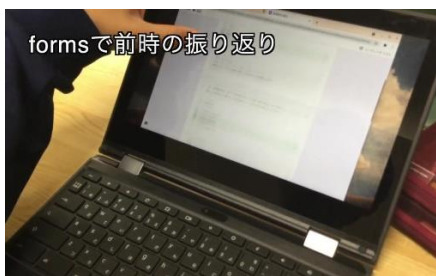
	17分	<ul style="list-style-type: none"> 全ての班の結果の入力が終わったら、手を止めて全員で実験結果を確認し、レポート用紙に記入する。弦の振動を目視して、気づいたことがある班は、スプレッドシートに記述する。 演示にて、 <ul style="list-style-type: none"> ①音を大きくしたとき ②音を高くしたときに、オシロスコープの波形がどうなるかを確認。 Jamboardを使い、音の大きさや高さとおシロスコープの波の形で気づいたことを個人で記入。数名発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> オシロスコープとは何かを口頭で説明する。 iPadとiPhoneのアプリを使い、TV画面で演示 Win Birdを使って2～3名に当てる。 	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">Chromebookを活用した、学習内容の説明や学び合いの実施</div>		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">実現したい子どもの姿をピクトグラムで具体化</div>		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">ICT機器を学習の手段として活用</div>
	終末	<ul style="list-style-type: none"> Formsを使って、本時の振り返りと自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価に、本時の発見や課題等を書かせる。 	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">GoogleFormsを活用した学習の振り返り</div>		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">意欲的に考察をまとめているか 【jamboard】</div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">音の大小・高低と、弦の振動との関係を自分の言葉で表現しているか 【ワークシート・Google Form】</div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">ワークシート【フ2】と下段のえり等は、次時できているとよ</div>
		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;">キーワードを積極的に用いた、学習内容の説明や学び合いの実施(GoogleFormsの活用)</div>		

(4) 指導実践例

本校で行っているICTの実践例の一部について紹介する。教科だけでなく、総合的な学習の時間や健康観察、家庭学習など様々な場面で活用している。

①教科での使用例

教師の資料提示や学習内容の共有、生徒の意見交流などに活用されている。



前時や本時の振り返りに Google Forms を活用した。



資料をスクリーンに映し出しながら解説するとともに、直接マーカーで書き込んだ。



英語では、デジタル教科書やデジタルワークなどが使用した。



スピーチの様子をお互いに Chromebook のカメラで撮影し、振り返りを行った。



スプレッドシートに自分の考えを記入し、お互いに共有した。



書画カメラ（実物投影機）で資料を拡大投影した。

②総合的な学習の時間での使用例

調べ学習や学習内容のまとめ、発表などに活用されている。スライドを使用し、共同で同時に作業できる。



Chromebook を活用し、自主研修の計画を立てた。



Google スライドを活用して修学旅行のまとめを発表した。



学習のまとめレポートを写真を交えながら Google ドキュメントで作成した。

③生徒会や委員会での使用例

生徒総会議案書をデジタル化したり、学校祭の発表でスライドを使用したりするなど、積極的に活用している。



生徒総会の議案書をデータ化し、Chromebookを見ながら協議を行った。



学校祭では、学級紹介を Google スライドで作成した。

④「Win bird」・「スマイルネクスト」の活用

室蘭市で試験導入が始まったアプリケーションソフト「Win bird」及び「スマイルネクスト」を活用した授業改善の取組を紹介する。

- Win bird によって、生徒の学習状況を教員が指導すべきタイミングで把握することができる。生徒の端末画面を一斉に映し出すとともに、生徒の端末画面を抽出することにより他者の意見を「見える化」でき、自分の意見との違いを比較することができた。



【『Win bird』の教員管理機能の画面】

- スマイルネクストによって、授業で表出した課題を、家庭学習に結び付けることができる。

授業で課題の見られた単元の練習問題を週末課題として配付し、家庭学習として取り組ませることにより、生徒の端末持ち帰りの必要感が高まった。



【『スマイルネクスト』課題配付機能の画面】

5. 成果と課題について

成果として、教員の Chromebook や I C T 機器の使用は日常的になってきたといえる。日々の実践交流により、場面に応じた I C T 活用方法について教員の見識が深まってきた。

課題としては、I C T の活用が生徒の学力向上にどれだけ結び付いているかを検証し、授業改善に生かすことである。また、生徒自身が Chromebook や I C T を活用する場面についての研修が必要である。

あしがき

令和5年度以降の本市学校教育の道標である「室蘭市子ども未来指針」が4月に策定され、「一人ひとりが夢を持ち、新たな時代に挑戦する力、生きる力を育む」ことがうたわれ、これまでの「学力向上基本計画」がその役目を終えました。コロナ禍により急速に進展したICT化の流れに、さらに生成AIが台頭するなど、教育の世界はめまぐるしい変化が起きていますが、市内各校の研究、並びに室蘭市教育研究所においてもその変化への対応が迫られているところです。

今年度本紀要では、研究奨励校、研究指定校における研究実践と、当研究所が取り組んだ研究活動について報告させていただきました。

まず、ICT部会では「室蘭市ICT活用交流サロン」の運営、周知、内容の充実に努めました。次に、授業づくり部会では市内各校の研究実践をまとめ、授業作りの提案を行いました。

また、2部会合同で開催した夏の研修講座では、スマイルネクストの操作・活用法や市内の授業実践報告、スマイルノートを使った道徳科の模擬授業体験などを実施し、4年ぶりの集合研修ではありましたが、現在のニーズに合致した実践的な講座内容について参加者の皆様から非常に良い評価をいただきました。

本研究所の次年度以降の動きとしては、年度途中で報告させていただきましたように、教育研究の交流拠点として市内各校の学びを集積・発信していくことで、それぞれの研究の充実に寄与していくことを目指します。また、インターネット上に教育情報ライブラリーを構築し、必要な情報の入手や実践の発信を支援し、市内の各先生方の省力化と力量形成にも貢献したいと考えています。

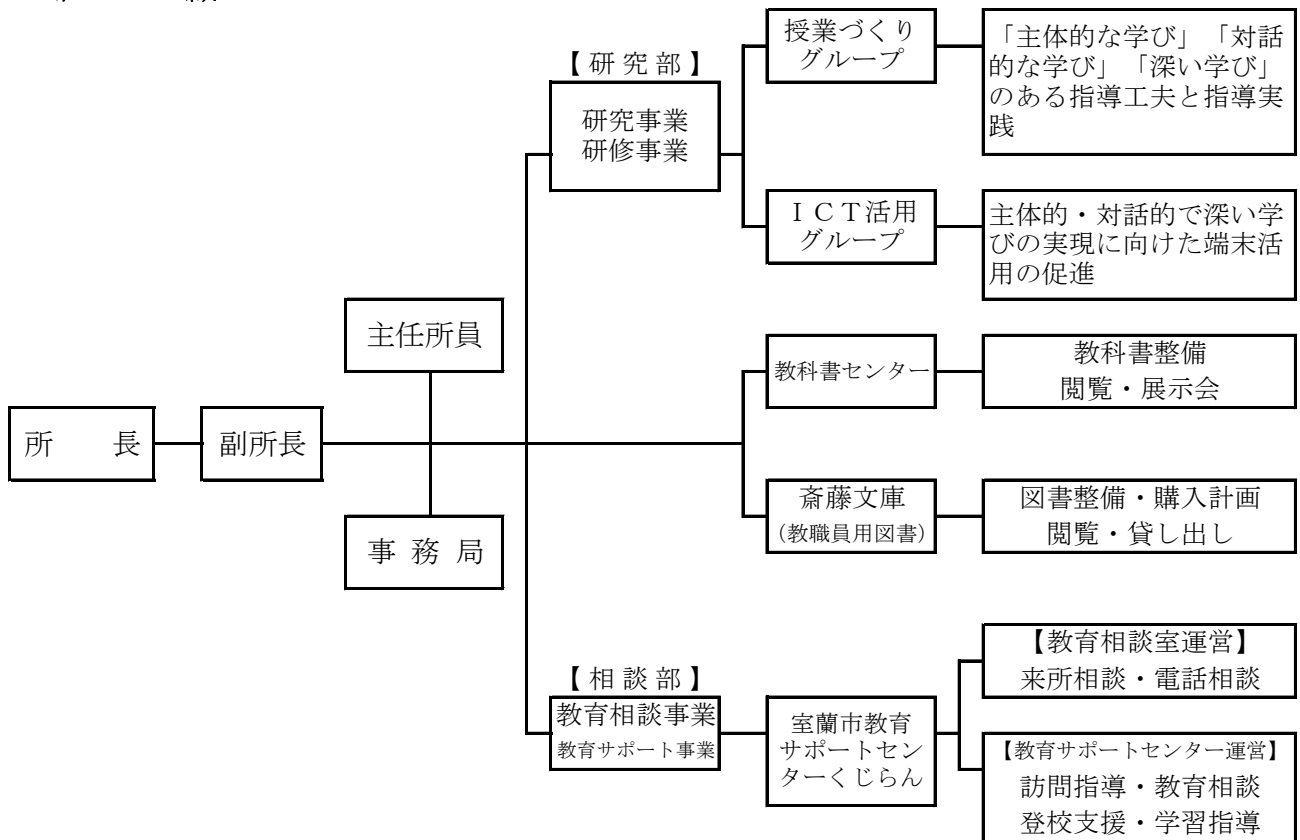
現在、我々教員は、これからの時代に求められる新しい力を子どもたちに身に付けさせるために、日々アップデートを続けなければならない状況にいます。子どもたちを「自立した学習者」に導くためには、まず教員自身が「自立した学習者」であることが求められます。室蘭市教育研究会が閉会した今、「市内の先生をつなぐ」ということに新たな立ち位置と役割を持ち、先生方をサポートしていけるよう研究所自身アップデートしていくことが、その存在意義につながると感じているところです。

本紀要が皆様にとって有益な情報源となることを願っております。御一読いただき、これからも研究所が市内の教育現場における課題解決と発展に向けて貢献できるよう御意見等をいただくと幸いです。

最後に、今年度の会場提供や協力をしてくださった皆さまに心から感謝申し上げます。皆さまのご支援とご協力により、研究活動を円滑に進めることができました。引き続き、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

室蘭市教育研究所
副所長 河内 大

1 組織



2 所員等

【研究部】

◎グループリーダー ○副リーダー

役	職	氏名	所	属	備考
所長		入村 貴行	室蘭市教育委員会		教育指導参事
副所長		河内 大	室蘭市立海陽小学校		教頭
主任所員		山本 伸也	室蘭市教育委員会		指導主事 研究部
		棟方 伸吾	室蘭市教育委員会		指導主事 相談部
事務局長		林 暁宏	室蘭市教育研究所		教育研究推進員
授業づくりG所員	◎	宮野 亜希子	室蘭市立蘭北小学校		教諭
		木戸 なつみ	室蘭市立八丁平小学校		教諭
		坂上 優	室蘭市立桜蘭中学校		教諭
	○	山本 祐揮	室蘭市立室蘭西中学校		教諭
ICT活用G所員		小林 雅哉	室蘭市立地球岬小学校		教諭
	◎	土田 一輝	室蘭市立白蘭小学校		教諭
		加藤 康平	室蘭市立翔陽中学校		教諭
		佐藤 昌也	室蘭市立本室蘭中学校		教諭

【相談部】 (室蘭市教育サポートセンター くじらん)

役	職	氏名	備考
SSW・教育相談員		中塚 洋司	センター長
		酒井 浩一	副センター長
SSW・訪問アドバイザー		市橋 麻子	柿崎 幸恵
		丸石 聖子	加藤 智佳子
学習支援員		石丸 いづみ	丸山 賢司
就学相談員		千葉 保	佐々木 秀人
			室蘭市教育委員会

令和5年度 室蘭市教育研究所研究部事業報告

月	日	曜	研究・研修事業関係	備考
4	11	火	研究所事業の説明等(定例校長会議) 市役所2階3号会議室 ※主任所員より	
	12	水	研究所事業の説明等(定例教頭会議) 市役所2階3号会議室 ※主任所員より	
	20	木	第1回所員会議・グループ会議 委嘱状交付 市役所2階1号会議室	
5	18	木	第2回所員会議・グループ会議 市役所2階3号会議室	
	25	木	令和5年度「運営計画」提出	
6	9	金	教科書センター小学校見本本収納完了	
	13	火	室蘭市各小中学校に対し、各校の研究主題・内容等の情報提供依頼 ※メール配信	
	15	木	研究所だより第1号配布	
	16	金	教科書展示開始 ~7月5日(水) 室蘭市教科書センター	
	23	金	ICT活用グループ臨時G会議 online ※夏の研修講座について 第3回オンデマンド会議用動画収録(2F1号会議室) 11:30~	
7	4	火	「夏の研修講座」案内・所員派遣依頼の文書発出(メール)	
	6	木	第3回所員会議配信 オンデマンド ~7.13(木)	
	27	木	授業づくりG臨時会議(蘭北小学校) 「イングリッシュ トライアル イン サマー」(中学生) 9:30~11:30 「夏休み 英語でトライ」(小学生) 13:00~15:00 市民会館	
	28	金	ICT活用G研修講座リハーサル(白蘭小学校)	
	31	月	室蘭市教育研究所ICT活用G「夏の研修講座」開催(白蘭小学校 PC室) 40名参加 室蘭民報取材	
	2	水	むろらん子どもサミット 海陽小学校 宮古市中学生参加	
8	23	水	教科書センター作業(旧教科書類を旧絵鞆小書庫へ)	
	25	金	第4回所員会議・グループ会議 オンライン Meet	
	31	木	研究所だより第2号配布 道研連全道発表大会(十勝大会)1日め 棟方参加	
	1	金	道研連全道発表大会(十勝大会)2日め 棟方参加	
9	14	木	第5回所員会議 online 派遣依頼・案内文書発出	
	5	木	天候悪化に伴う下校対応のためonline所員会議中止	
	18	水	桜蘭中学校公開研究会(学力向上) ※棟方・山本分科会助言者	
10	19	木	授業づくりG臨時会議 15:30~ online	
11	2	木	東明中学校公開研究会(パイロットスクール) ※棟方、分科会助言者	
	8	水	ICTグループ臨時会議15:30~ online 定例校長会議にて、「研究所の在り方を考える」提案→了承	
	14	火	みなと小学校公開研究会(パイロットスクール) ※山本分科会助言者	
	22	水	白蘭小学校公開研究会(学力向上) ※棟方・山本分科会助言者	
	27	月	旭ヶ丘小校内授業研究会に宮野所員参加 港北中校内授業研究会に山本所員参加	

12	5	火	翔陽中校内授業研究会に土田所員・坂上所員参加	
	20	水	八丁平小校内授業研究会に宮野所員・小林所員参加 道研連道南ブロックのR6共同研究推進委員の選出と新たなローテーションについて各研究所に連絡文書発出	
	21	木	「研究所だより第3号」発行	
	22	金	道研連道南ブロックのR6共同研究推進委員を渡島と胆振から選出することについて道研連事務局へ報告	
	27	水	授業づくりG臨時会議 14:00~ 蘭北小図書室	
1	10	水	「冬休み 英語でトライ」(小学生) 9:30~11:30	
	12	金	道研連第3回共同推進委員会(山本代理出席)13:30~16:00 Online	
	15	木	第6回所員会議・グループ会議 14:30~ 本庁舎2F大会議室	
	29	木	「研究所だより第4号」発行	
3	14	木	「研究紀要第58号」発行	
	21	木	室蘭市学校適応指導教室経過報告提出	
	29	金	令和5年度「教育研究所 沿革」提出	



(鍋島山からの夜景)

研究紀要 第58号

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業の工夫・改善
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けて～

発行	令和 6年 3月
発行所	室蘭市教育研究所 〒051-8511 室蘭市幸町1番2号 TEL (0143) 22-5059 FAX (0143) 22-6602
発行者	所長 入村 貴行
製本所	株式会社北海印刷

